

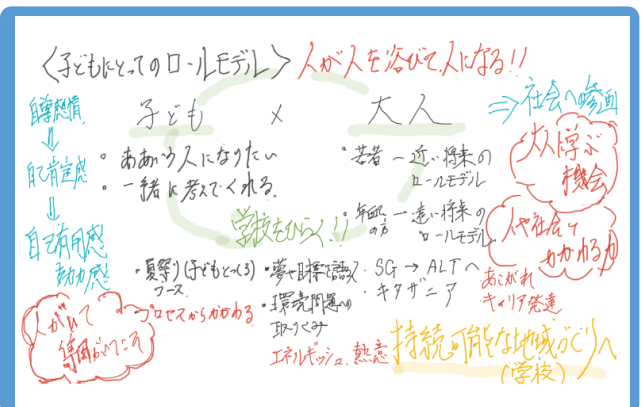
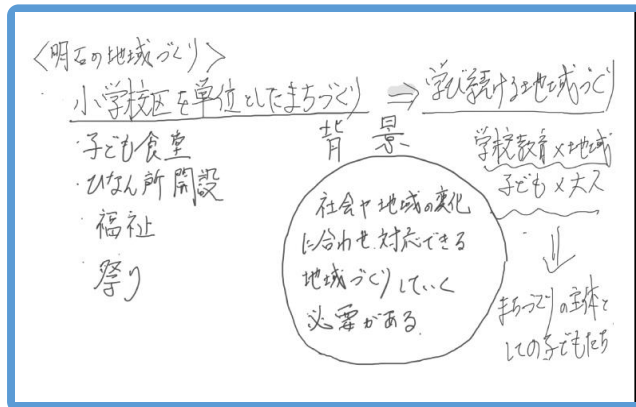
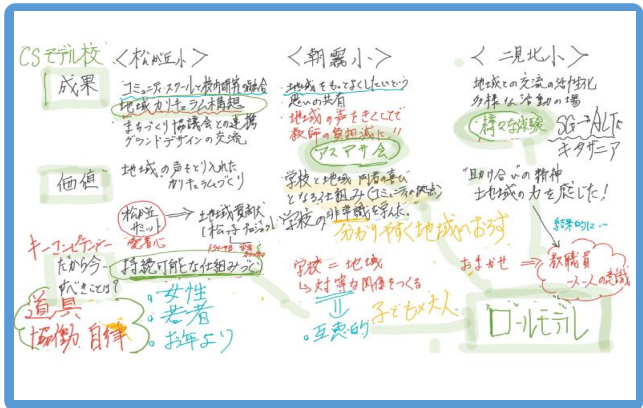
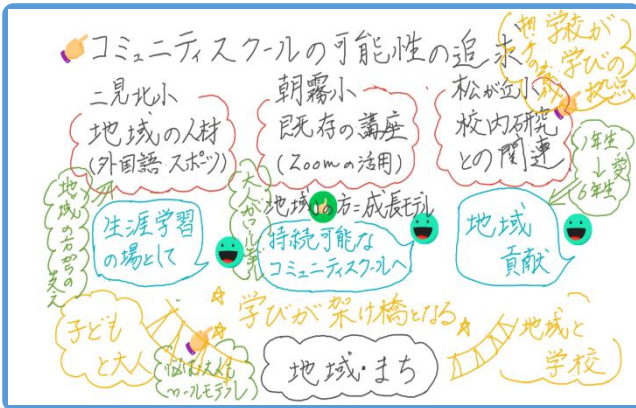
人をつなぎ 未来をつなぐ
 明石のコミュニティ・スクールだより
 KOMIKOMISUKUSUKU
 未来への教育を考える特別号

明石市教育委員会事務局学校教育課
 mail : gakkyo@city.akashi.lg.jp



TwitterQR
 未来への教育を考える特別号
 No. 14 2021. 3. 31

「明石市コミュニティ・スクール推進フォーラム」から学ぶこと



今年度はコミュニティ・スクールにかかわるオンライン研修として「Meet de 対話」を Part1・Part2・Part3・Part4 と開催し、そして今回の推進フォーラムと繰り返す中で、計画する我々自身がコミュニティ・スクールのイメージを少しずつ共有できてきたのではと思っています。コミュニティ・スクールを単なる地域との連携といった理解でコミュニティ・スクールという器をつくるのではなく、コミュニティ・スクールを日本の未来を創る教育の質的改善の仕組として理解を深めていくことが求められていると考えます。そうした意識の転換が図れるかどうかはこの1~2年が勝負なのではと思っています。この1年オンライン研修を実施するにあたり、進行するにあたって、また記録に落とすにあたって「コミュニティ・スクールって何？ これからの必要な学びは？」と悩みながら対話を重ね、コミュニティ・スクールのイメージをつくり、共有する中で、今後の学びのあり方を考え始められるようになったのではと思います。そんな指導主事の学びを見ていただけたらと思います。そして、この4月から現場の校長として最前線に出られる北迫主幹よりメッセ

ーじもいただきました。本号が今年度の最終号です。コロナ禍の中で社会が大きく変わろうとしている中、教育の質の転換と改善が必要になってきます。新年度のチャレンジへのヒントになればと思っています。

三つの実践から学んだコミュニティ・スクールの可能性

学校教育課千原指導主事

○二見北小

- ・地域との交流の活性化によって多様な活動の場を得ることができること。
- ・助け合いの精神を学ぶことができ、結果的に教職員一人一人の意識を高めることができること。

○朝霧小

- ・地域の声をきくことで、教師の負担減につながっていくこと。
- ・学校の非常識さや分かり易く地域に説明することの大切さを学べること。

○松が丘小

- ・地域とランドデザインの交流をすることができ、まちづくり協議会と連携することができること。
- ・松が丘サミットで地域の方との対話を通して、愛着心を育てることができること。

○コミュニティ創造協会 木上さん

- ・明石の地域づくりとして、社会や地域の変化に合わせ、対応できる地域づくりができること。
- ・学校×地域、子ども×大人でまちづくりの主体として子ども達を育てていくことができること。

○小西先生のお話から

- ・女性、若者、お年寄りが地域で活躍できるような持続可能な仕組みづくりに生かせること。
- ・PISA（OECDが行う学習到達度調査）のキー・コンピテンシーでは、道具＜相互作用的に道具（知識・情報・技術等）を用いる＞、協働＜異質な集団で交流する＞、自律＜自律的に活動する＞という3つの力が必要とされている。このような力を育てていくことができる可能性がコミュニティ・スクールにはあること。
- ・ロールモデルとして、地域の大人とかかわっていくことで、人や社会とかかわる力（非認知スキル）を育てていくことができる。例えば、若者は近い将来のロールモデルに、年配の方は、遠い将来のロールモデルになる。様々な年代の大人に学ぶ機会を得ることで、子どもたちは、憧れをもって学ぶことができること。

○コミュニティ・スクールの可能性について

今回のフォーラムを通して、コミュニティ・スクールの可能性は、子どもたちがロールモデルとなる大人とかかわり合いながら学びを発展させていく環境を創り出せることだと感じました。学びを学校で完結するのではなく、地域において発展させることで子どもた

ちの資質・能力を伸ばしていくことができるということです。さらに、子どもたちや大人がコミュニティ・スクールの仕組みを生かして地域で学び続けることにより、地域への愛着心を持ち、まちづくりに積極的に参画できる人材を育てることができると考えています。

学校にとって、教育課程をひらくことは、「負担がよけいに増える」「安全上の問題はどうか」など反発をまねくかもしれません。私も昔はそう考えていました。しかし、今は、コミュニティ・スクールは負担ではなく、社会に開かれた教育課程を実現させるために必要不可欠な仕組みであると確信しています。この仕組みをいかし、持続可能な学校づくりを進め、社会に開かれた教育課程を実現させていきましょう。

存分に引き出されたコミュニティ・スクールの可能性

学校教育課本所指導主事

『共に悩み、共に考える大人』が子どもにとってのロールモデルになる」、コミュニティ創造協会、木上さんの言葉です。1年前にコミュニティ・スクール研修会でお話いただいた、苫野一徳先生も著書の中で、教師や大人は子どもにとっての「共同探究者」であるべきだと表現されています。「誰かが既にもっている知識を一方向的に受け取る。」という学び方だけでは、これからの時代を生き抜くためには不十分なのだと思います。どれだけ専門的な知識や技能をもっている、急速に進展する社会に合わせて、新たな知識や技能を学び続けていかなければならない今があり、今後それがさらに加速すると考えます。つまり、子どもたちにとって、悩み考え抜き、学び続ける大人を身近に感じるこそが、社会の好循環を生み、今後の日本に差し迫る諸問題を解決するための有効な手立てになるのではないのでしょうか。

一人当たりのGDPの低下、日本企業の時価評価ランキングの著しい低下…小西先生に提示いただいた現実にはあまりに衝撃を受け、言葉を失いました。加えて、高齢化率、若者の自殺者の多さなど、私たちは一体どれほど大きな課題と向き合っていないといけないのか、とある種の絶望を抱きました。しかし、冷静に考えると、これまで変えようとしてもなかなか変えることが難しかった、社会や学校教育のしくみが限界をとうに超えているのだろう考えました。小西先生もおっしゃっていましたが、それらの課題は結果として表れている現象ですので、その根本に働きかけていかなければ、課題解決はできないということがとても重要だと感じました。

新たな学びを創っていく、社会のしくみを変えていく…どちらも実行するととなると、困難に感じますが、大きな課題に向かっていくための確実な一手を3校の校長先生方から教えていただきました。二見北小学校赤松校長先生は、「子どもたちが書いた感謝のお手紙が嬉しくて、地域の方が図書を学校に寄贈してくださった。子どもたちと地域の方とのつながりが形になった。」と話されました。また、朝霧小学校尾崎校長先生は、「朝霧小学校の子どもたちは、朝霧の町づくりに夢や目標を語る大人を見て、自分たちも夢や目標を語れる大人になりたい、と意気込んでいる。」と話されました。そして、松が丘小学校西原校長先生は、「入学してから地域の方の愛をたくさんもらった子どもたちは、高学年になるにつれ、今度は私たちが地域に貢献したいという気持ちをもつようになる。決して松が丘プロジェクト、松が丘サミットありきではなく、真ん中にあるのは、地域の方と子どもとのつながりである。」と話されました。実践を通して生まれたこのお話は、力強く大変胸が熱く

なるお話でした。このお話を通して感じたことは、3校それぞれの取組によって「子どもたち、そして地域の方の『心』が動いている」ということです。このように心が動くことによって、意識が変わり、行動が変わり、地域・学校が変わるのだと考えます。そしてその営みがひいては、日本をよりよくしていくことにつながっていくと確信しました。

解決しようとする課題が大きければ大きいほど、働きかける先は問題そのものではなく、その問題に立ち向かう人の心、内面であることを痛感しました。コミュニティ・スクール推進フォーラムを通して、地域と学校が、また子どもと大人が「つながる」ということの意味を再認識しました。言葉は平易ですが、その意味の奥深さを実感しました。「双方の心が動くつながり」これが、「つながる」ことの意味ではないでしょうか。普段の教育活動の中でも、子どもたちの心が動く場面は多いと思います。それは変容や成長と表現できると思います。その子どもたちの変容や成長を地域の方と共に喜び、手応えを感じられることがコミュニティ・スクールによって可能となります。「地域の担い手として、人や社会とかわる力をどのように身に付けるのか、ということ地域と共有し続ける。」という小西先生の言葉は、今後のコミュニティ・スクールの在り方につながるものだと捉えました。

今回ご参加いただいた全員の方に直接ご意見をいただくことができなく残念に思います。今後も、今回の推進フォーラムのように実践を基にした交流の場を設けていきたいと考えていますので、次の機会にもぜひご参加いただきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

学びの架け橋 コミュニティ・スクール

学校教育課今市指導主事

私が小学校の教諭として勤務していた頃、子どもたちには、「自己実現と社会貢献を重ねることができれば、多くの方から共感を得られます。今はそのための準備をしています。」と話していました。また、初めてコミュニティ・スクールという言葉を目にしたとき、学校での学びを地域がサポートするというイメージをもちました。そして、地域が学校にできることは、限られているのではないかと感じたことを覚えています。

しかし、明石市コミュニティ・スクールにかかわるオンライン研修に携わる中で、「学び」は生涯を通して行うものであり、「学び」が学校と地域の架け橋となることで、子ども、教職員、地域の方々がリアルタイムで社会貢献できることに気づきました。また、コミュニティ・スクールの可能性は限られたものではなく、高く、大きく、遠くへと広がっており、その本質は、「学び」を軸にして、学校、地域、社会と区切られていたものを、ひとつの社会としての枠組みに組みかえていくところにあるのではないかと感じました。

これからも「学び」を架け橋として、明石の教育に貢献できるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

学校と地域の双方向の扉を開き！ 学校現場に意識と変革を！

学校教育課主幹兼指導係長 北迫 嘉幸

コロナ禍において、本年度「Meet de 対話」「CS推進フォーラム」を開催できたことは、大変意義深かったです。人が集まりにくい中、オンラインを活用し実施できたことは、ウ

イズコロナ時代にあって、新しい形の協議方法を提案できたといえます。また、地域の方々やまちづくりに携わる方々の参加により、一つのテーマの下、様々な立場の人が様々な視点から考える時間を共有することができました。

コミュニティ・スクールは大きく言うと、「地域の子どもたち一人ひとりの豊かな人生を育むために、地域のみんで応援していきましょう、結果的に自分たちも人間的に成長していきましょう」ということです。そのためにどのような取組が必要か？ 推進フォーラムでの3校の発表がおおいに参考になりました。3校に共通していたことは、学校と地域の交流・連携・協働です。特にカリキュラムマネジメントを積極的に行う中で、学校だけで学びを完結するのではなく、地域や社会にまで踏み込むことで、子どもたちの資質・能力を伸ばすことを教えてくれました。それは、中央教育審議会の「令和の日本型学校教育」にも示されている「たくましく、新たな可能性を導ける人材」「未知の課題に対して挑戦し、問題解決できる人材」の育成につながるものだと考えます。

これからの困難な時代を幸せな時代に転換していくために、学校だけの学びだけではなく、地域や社会の場を教材にして試してみる、考えてみることや、地域の方々を巻き込んで学んでいくことの大切さを改めて感じています。そのために、学校と地域の双方向の扉を開く時期に今来ています。学校現場に意識と変革を！ 来年度も引き続きチャレンジしていきましょう。

あわただしい年度末ですが、あっという間に新年度が始まります。新年度にはタブレット端末の一人一台が明石でも実現します。ニュースで近畿の公立小学校で始まっているGIGAスクールへの取組が紹介されていました。社会科の授業で調べたことをプレゼン資料としてまとめ、互いに発表し合うという授業場面が紹介されていました。そしてその授業を受けての、子どもたちの端末の扱い方やプレゼンの仕方等授業方法の意見や理解面等での意見の交流される教員による研究会の様子も紹介されていました。それを見てのコメントーターのコメントは、デジタル化の流れに遅れないようにしながら、これまで大切にされてきたものには意味があるといったコメントでした。これまでの授業の中に端末を押し込もうとしているように私は思えました。これはこれまで繰り返し見てきた光景です。また、別のニュースでは教育系 YouTube を活用しての受験の様子が紹介されていました。わからなところを繰り返し見ることができるメリット、最新の情報が得られるメリット等受験生から視点から紹介されていました。現場の先生方は教育系 YouTube とどのようにこれから付き合っていくのでしょうか。それぞれの番組で「主体的・対話的で深い学び」が紹介されていましたが、「主体的・対話的で深い学び」を行うことがゴールではなく、「主体的・対話的で深い学び」を積み重ねてきた中で身に付いた力を発揮し、その力を更新していくことが大事だという視点を持つことが必要だと考えます。これからの学びをデザインする上で、“教育” そのもののイメージを変えていく必要があると考えます。時代はその方向に動き始めているのではと思います。そうした動きを教職員だけでなく、保護者のみなさん、そして地域のみなさんがまず共有できるよう動いていくことが必要だと考えます。そんなことが新年度スタートする学校がふえたらいいなと思っています。

(文責：北本)